佐藤春夫と『太平広記』（一）

張　文宏

はじめに

大正の末期から昭和にかけて、「文壇には支那文学の伝統が表向には絶滅したやうに見えたし、国民一般の注意は欧米の方に眩惑され」(1)た。そんな状況の中で、「支那文学愛好者」の佐藤春夫は中国文学の紹介に力を注ぎつつ、現状に対する不満と、中国の通俗小説を選択する理由を次のように語っている。

> 勿論その頃わが国に立派な支那文学研究者が絶無であつたといふわけではない。たゞその諸先生方の研究は高遠に過ぎて、支那に興味を失つてゐた当時の青少年にはあまりに隔絶してしまつてゐたのである。支那文学も支那文学専門家も偕に高閣に束ねられてしまつてゐたといふべきであらう。その間にあつて自分のやうに通俗に卑近なものがはじめて役に立つたのである(2)。

若き佐藤春夫は父親から「支那文学の研究の疎かにすべからざるもの」と教示されており、翻訳と翻案の形で努力の姿を示したのである。彼はヨーロッパ語を参考にし(3)、まず『東周列国志』『聊斎志異』『今古奇観』『情史』などの通俗小説を数多く訳出し、それらを『玉簪花』（新潮社、大正一二年八月）に綴り込んで出版した。『玉簪花』により、当時の日本の庶民階層は中国小説の特有の面白さと怪異さが読み取れるようになったと言える。

さらには若い世代に隣国の中国を理解させるために、春夫は絶えることなく中国の通俗小説に着目している。『玉簪花』出版の六年後、少年少女向きの『支那童話集』（アルス発行、昭和四年一月）も上梓された。童話としてそこに収められた翻訳・翻案作品の三分の二は『太平広記』（以下は『広記』と略する）に取材した仙人の話である。この「ますです体」で「しゃべるように」書いた作品は少年少女の読者たちの興味をそそる。『支那童話集』の成功により、『広記』から素材を採り続ける春夫は読者層を拡大するように、皇帝の逸話や異類婚姻譚など、取材源もジャンルの幅も広げてきた。その春夫の姿勢は鷗外・鏡花・荷風・芥川らを継ぎ、大正～昭和期の中国文学愛好の例証を示

していると言えるのである。

本稿では、『広記』に関わる基礎資料を出発点に、春夫の『広記』取材の作品の個別的な考察を通して、彼の翻訳・翻案の方法とその特徴を明らかにしようと思う。

一、『太平広記』の諸本及び研究現状

宋王朝は中国を統一してから、各王国の図書を集めたが、降伏した諸国の臣下には天下に名の知られた学者が多く、怨みを公言することがあったので、彼らをのこらず館閣に招き、高額の手当を出して、書物を編纂させ、『太平御覧』『文苑英華』各一千巻ができた。さらに、野史、伝記、小説の各部門の著作から編纂して本文五百巻、目録十巻の書物ができあがった。これが、『太平広記』である(4)。

右のように、魯迅は『中国小説史略』で『広記』の編纂理由を述べている。だが、李昉の「進書表」によれば、その理由は宋太宗の「體は聖啓を周くし、徳は文思に適れ、群言を博総し、衆善を遺さず、以為えらく編秩既に広く、御覧周くし難し、故に菁英を采摭し、類例を裁成せしむ」(5)という言葉であった。

宋の太平興国二年（九七七年）三月に、太宗の勅命によって李昉ら(6)が編纂を開始、翌年八月に完成、太平興国六年（九八一年）正月に版木に彫られた。これは漢から宋の初期までの四百を超える書物から約七千編を抜き出し、神仙・神・道術・夢など九二項目に分類した総集である。しかし、学者には不必要であるとの異論が出て、この本は版木のまま収蔵されてしまい出版されなかったと言われている。その版木は保管されたが、明代には写本を残すのみとなり、版木自体は無くなってしまった。明の嘉靖四五年（一五六六年）に談愷が写本を元に版刻し、隆慶元年（一五六七年）にその修正版が出版、これが即ち談刻本、今流布するものの原本である。

明代には、談刻本に続いて許自昌による許刻本、常州府の版本、活字本があるが、後二者はほとんど見られない。清の乾隆年間の黄晟の黄氏巾箱本が談愷本に修正を加えているが、基づいたところを明らかにしていないので、信用しきることはできない。また、清の陳仲魚が宋本を発見し、許刻本と校合し、その結果を許刻本に書き入れた。宋本は後に散逸したが、陳氏の許刻本は現在、北京図書館に所蔵されており、陳氏手校本と呼ばれている。また、台湾大学に孫潜が宋本との異同を書き込んだ談愷本、いわゆる孫校本がある。さらに、呉県の沈氏の家より談刻本とも系統が異なる野竹斎鈔本或いは明鈔本と呼ばれる明代の写本が発見され、これも北京図書館に所蔵されている。ただし、陳氏手校本と野竹斎鈔本は一般には公開されていない。一九五九年に汪紹楹（おうしょうえい）が談刻本を底本として、これらの諸本によって校勘した点校本を人民文学出版社より出版、一九六一年九月に中華書局よりその誤植を正して再版された。汪校本（中華

書局本とも言われる）は信頼度が高く、且つ入手しやすいもので、現在もっとも流通している。

中国文学史上、『広記』は他の類書とは比べ物にならないほどの貴重な価値を持っている。それは『広記』には他書には見られない小説の佚文が相当数引用されているということである。「漢代晋代より五代に至る小説家の言は、もとの書物がいまではすでに散逸してしまったものでも、往々この書によって考察することができる。（略）稗史小説の宝庫たるのみならず、文学潮流の統計表ともなっていよう。」(7)と、魯迅も指摘している。また『集外集拾遺補編』中の「『唐人説薈』の正体を暴く」で、魯迅は『広記』の長所を取り上げながら、中国文学の研究者にこの書籍を推薦した。

> 思うに『太平広記』の長所は二つある。一は六朝から宋代初期までの小説がほとんどすべて収録されており、もし大まかな研究であれば、他に多くの書物を買い込まずにすむからである。二は妖怪、鬼神、和尚、道士といったように一類ずつきちんと分類され、十分なほど集めてあって、うんざりするくらい読むことができる(8)。

全五百巻の『広記』は日本語版の完訳がないが、近年、その一部分の日本語の訳注が出版された。その中では、木村秀海監修・堤保仁編『訳注太平広記　鬼部』（一～四）（やまと崑崙企画、一九九八年七月～二〇一〇年三月）、塩卓悟・河村晃太郎編『訳注太平広記　婦人部』（汲古書院、二〇〇四年七月）、今場正美・尾崎裕著『「太平広記」夢部訳注稿』（中国芸文研究会、二〇〇五年四月）は大量な注釈を書き入れたものである。それに、『広記』の引用書籍、例えば『搜神記』、『酉陽雑俎』の日本語訳も見られる。竹田晃訳『搜神記』（平凡社、一九六四年初版）、今村与志雄訳『酉陽雑俎』（平凡社、一九八〇年一月）、佐野誠子訳『搜神記・幽明録・異苑他』（『中国古典小説選』二、明治書院、二〇〇六年一一月）などがある。

『広記』に関する先行研究については、管見の限り、中国では一九三〇年頃から発足したが、専門的な著作は九冊しか上梓されていない。文化大革命の中で、『広記』は発禁本にされたから、本格的な研究は一九七九年から開始して以来、学術論文は僅か百編ほどしか発表されていない。最近の二〇年間では、『広記』をテーマとした修士、博士学位論文は、台湾を入れて、約二〇編であるが、台湾のほうがその半分を占めている。

張国風氏の「『太平広記』の版本の変遷」（『文献』、一九九四年第四期）をはじめとする、テクストを中心に考察するところに関心が集まっている。范崇高氏らは『広記』の注釈や校正についての研究により好評を博した。また、文化や歴史の角度から『広記』に検討を加える論もあったが、質がよくないようである。だが、張傑氏の「魯迅と『太平広記』」（『魯迅研究月刊』、二〇〇一年第一二期）は、魯迅の『広記』観を再評価し重視さ

れている。

日本における『広記』の研究に関しては、稲田尹の「『醉翁談録』と『太平広記』（『神田博士還暦記念書誌学論集』、平凡社、一九五七年一二月。所収）と、竹田晃の「二〇巻本『搜神記』についての考察」（『中国文学研究』二、一九六一年）とは、嚆矢となった。近年、富永一登氏は「『太平広記』の諸本について」（『広島大学文学部紀要』五九、一九九九年一二月）を通して、その諸本のシステムと日本での所蔵を詳細に検証してきた。

このように、日本における『広記』の研究はテクスト関連が中心になったということである。

上述の研究史から見ると、日中両国の学者はどちらも『広記』の版本に焦点を絞っているが、『広記』による翻訳・翻案作品を対象とした研究には殆ど触れていないようである。実際は、春夫年譜にある如く、彼は中国古代の女流詩人の訳詩集『車塵集』（武蔵野書院、昭和四年九月）と同じ時期に『広記』の訳業を始めたのである。

二、『広記』取材の諸作品

「広記は実に小説の淵藪であるばかりでなく、また古代支那文学の関心が那辺にあつたかを窺ふ好個の統計である。」(9) と言い、『広記』の重要性を強調している春夫は、昭和四年～昭和二六年の約二二年間に、『広記』から取材した作品を一五編も発表した。その初出の年代順によって以下にまとめる。（括弧内の冒頭の巻数は『広記』のものである）

①昭和四年一月一〇日アルス発行の『支那童話集』に掲載。

○「美しい絹を織る妻」
（巻第五九「女仙」四「董永妻」、出典『搜神記』）

○「奇妙な虫」
（巻第四七六「昆虫」四「陸顒」、出典『宣室志』）

○「徐福」
（巻第四「神仙」四「徐福」、出典『仙伝拾遺』『広異記』）

○「仙人になつた人」
（巻第五「神仙」五「陳安世」、出典『神仙伝』）

○「維陽の十友」
（巻第五三「神仙」五三「維楊十友」、出典『神仙感遇伝』）

○「人を驢馬にする話」
（巻第二八六「幻術」三「板橋三娘子」、出典『河東記』）

○「廬山人」
（巻第四三「神仙」四三「廬山人」、出典『酉陽雑俎』段成式撰）

○「仙術のいたづら」
（巻第五二「神仙」五二「張卓」、出典『会昌解頤録』）

○「恐ろしい古井戸の話」
（巻第二三一「器玩」三「陳仲躬」、出典『博異志』）

○「いひ伝へにそむいた人」
（巻第四三「神仙」四三「尹真人」、出典『宣室志』）

②昭和一一年九月一六日河出書店発行の『世界短篇傑作全集』第六巻「支那印度短篇集」に収録。
○「元無有」
（巻第三六九「精怪」二「元無有」、出典『玄怪録』牛僧孺撰）

③昭和一六年五月一日発行の『国民五年生』（第二一巻第二号）、同年一二月一日同誌（第二一巻第九号）にそれぞれ掲載。
○「親友が虎になつてゐた話」
（巻第四二七「虎」二「李徵」、出典『宣室志』張読撰）
○「玄宗皇帝と仙人たち」
（巻第二九「神仙」二九「十仙子」「二十七仙」、出典『神仙感遇伝』）

④昭和二六年九月一日発行の『美しい暮しの手帖』（第一三号）に掲載した「愛妖記」に収録。
○「柳毅の話」
（巻第四一九「龍」二「柳毅」、出典『異聞集』李朝威撰）
○「任氏の話」
（巻第四五二「狐」六「任氏」、沈既済撰）

以上の作品の多くは、日本に紹介されたことのない珍しいものであるばかりではなく、中国でも散逸したりして珍重すべきものである。春夫がいつ頃から『広記』と出会い、またいかなる版本に拠ったかは記載されなかったから、明らかに言いにくいが、作品の前書きや短評などに魯迅の言説が多く援用されたという点で、魯迅からの影響を無視してはいけない。魯迅は様々な『広記』の版本に目を通したが、一九二六年頃、校正や校勘などに多く活用したのは清の黄晟本であると認められる（10）。これにより、一九二九年に『広記』に着手した春夫は魯迅と同じく黄晟本を依拠本文にしたのではないかと思われる。今後はその課題についても検討していきたいが、本稿では考察の対象から除外する。

また「何故に女を殺したか」（大正一二年一月、『サンデー毎日』は「馮燕伝」（昭和一一年九月、『世界短篇傑作全集』に収録）と内容が同じだが、両者とも『広記』巻第一九五「豪侠」所収の「馮燕」と相違点が多く、『広記』取材の作品としては扱われない。だから、ここでは考察の対象外としておく。

三、「美しい絹を織る妻」とその典拠

『支那童話集』の「はしがき」に、「主に『東周列国志』『聊斎志異』『今古奇観』『太平広記』などといふ支那のむかしの本

から材料をとつたものであります。別に童話といふのではありませんが、少年少女たちが読んでよかろうと思ふものを集めてみたのです。」と書いてある。この童話集に収められた一六編の中で、『広記』に取材したものは一〇編を占める。その中では、「美しい絹を織る妻」において春夫による改変が目立つが、他の九編はほぼ逐語訳である。本節では、典拠の「董永妻」とその周辺資料とを比べながら、「美しい絹を織る妻」の成立過程を分析するとともに、その創作方法にも検討を加えたい。

○「美しい絹を織る妻」のあらすじ

(1) 漢の時代、一人の男がいた。幼時、母は死んでしまい、一九歳になったばかりで父も世を去った。

(2) 父のお葬式の費用がないから、彼は自分の身を金持ちに売ると決心する。

(3) 奴隷奉公をするようになったわけを書いた札を貼り付けられた彼は、ある役人に買い取られた。

(4) 彼は過労で重病にかかって、美しい女は彼を看病した。その上に、二人は結婚した。

(5) 女は、金を儲けて男にあげるために絹を織る。

(6) 女は美しい絹で得た金で、夫の自由を買い戻した。

(7) 女は男の子を産んだ。この子は生まれてから三日目には話をするし、七ヶ月目には聖人の格言をおぼえる。十一ケ月にもならないうちに、文字を写すことができた。

(8) 女は天命によって、男の孝心に報うために人間に来た女神であることを打ち明けて上空に消えた。

▽典拠『広記』巻第五九「女仙」四「董永妻」

董永父亡。無以葬。乃自売為奴。主知其賢。与銭千万遣之。永行三年喪畢。欲還詣主。供其奴職。道逢一婦人曰。願為子妻。遂与之俱。主謂永曰。以銭丐君矣。永曰。蒙君之恩。父喪収蔵。永雖小人。必欲服勤致力。以報厚徳。主曰。婦人何能。永曰。能織。主曰。必爾者。但令君婦為我織縑百匹。於是永妻為主人家織。十日而百匹具焉。

▽『広記』の引用書籍『搜神記』巻一「董永と織女」(波線部は筆者、以下は同様。)

漢、董永、千乗人。少偏孤、与父居。肆力田畝、鹿車載自随。父亡、無以葬、乃自売為奴、以供喪事。主人知其賢、与銭一万、遣之。永行三年喪畢、欲還主人、供其奴職。道逢一婦人曰。願為子妻。遂与之俱。主人謂永曰。以銭与君矣。永曰、蒙君之恵。父喪収蔵。永雖小人、必欲服勤致力、以報厚徳。主曰、婦人何能。永曰、能織。主曰、必爾者。但令君婦為我織縑百疋。於是永妻為主人家織。十日而畢。女出門、謂永曰、我、天之織女也。緣君至孝、天帝令我助君償債耳。語畢、凌空而去、不知所在。

◇書き下し文

漢、董永は、千乗の人なり。少くして偏孤にして、父と居り。力を田畝に肆くし、鹿車もて載せて自らは随ふ。父亡ずるに、以て葬る無く、乃ち自ら売りて奴と為り、以て喪事に供す。主人其の賢なるを知り、銭一万を与へ、之を遣る。永は三年の喪を行ひ畢はり、主人に還りて、其の奴の職を供せんと欲す。道に一婦人に逢ひて曰はく、願はくは子の妻と為らん、と。遂に之と俱にす。主人永に謂ひて曰はく。銭を以て君に与ふ、と。永曰はく、君の恵を蒙り、父の喪を収蔵す。永は小人なりと雖も、必ず勤めに服し力を致し、以て厚徳に報いんと欲す、と。主曰はく、婦人何をか能くす、と。永は曰はく、能く織る、と。主曰はく、必ず爾ればは、但だ君の婦をして我が為に縹百疋を織らしめよ、と。是に於いて永の妻主人の家の為に織り、十日にして畢はる。女は門を出ので、永に謂ひて曰はく、我は、天の織女なり。君の至孝なるに縁り、天帝我をして君の債を償ふを助けしむるのみ、と。語り畢はるや、空を凌ぎて去り、在る所を知らず。

（佐野誠子訳『捜神記・幽明録・異苑他』（前掲同）に拠る）

以上の資料と照合すれば、宋の『広記』の「董永妻」は晋の『捜神記』の「董永と織女」と重なったところが多いが、両方とも「美しい絹を織る妻」とは異なっていることがわかった。「董永と織女」の波線部の付いた部分は「董永妻」にはないのに、「董永妻」を典拠とした「美しい絹を織る妻」に見られる。つまり「美しい絹を織る妻」の冒頭（1）と末尾（8）は「董永と織女」のそれらに近い。だから、春夫が『広記』を調べる時に、『捜神記』も読んでいたと推測しやすい。だが、「美しい絹を織る妻」の（3）（4）（6）（7）は「董永妻」とも「董永と織女」とも相違する。その作品は心理描写や対話の多用により、重みがある小説になった。特に（7）つまり女の息子が神童として描かれたところに、春夫の大胆な加筆が見られる。そのような発想は六朝の超自然的な怪異譚と伝奇物語から出てきたと思わざるを得ない。

中国では、董永の「孝行」は後世の範として「二十四孝」の一つと数えられるし、魏の曹植の楽府詩「霊芝篇」（11）をはじめ、晋の「董永と織女」、後に「天仙配」といった民間伝説と戯曲に至り頻出している。中では、六朝の任昉の『述異記』（『広記』の引用書籍）中の「牽牛織女」には、牛飼いの男「牛郎」と天の神の娘「織女」との恋情が中心的に語られ、「孝行」が消えてしまったが、「董永と織女」と重なった内容が見られる。六朝以降の「董永像」に「天人女房」の類の物語要素が混じり込んだ上に、「七夕」の由来ともしっかり繋がってきた。要するに、董永の「孝行」が民間で広く伝わって以来、多くの周辺的な民話要素が色濃く織り込まれてくる。したがって、「美しい絹を織

る妻」が典拠の「董永妻」を乖離した主な理由は、作者が少年少女の読者を面白く読ませるために、想像力を生かし、「董永」に関連する民間伝説を多量に書き加えたからである。

ちなみに、春夫の「もの言ふ牛の話」（一九三九年七月一日『改造』に掲載された「呼牛呼馬篇」の第二話）に少し言及したい。その作品の内容は「牽牛織女」と同じ、しかもその冒頭に「民話と言へば、ここに山東省で行はれてゐる民間伝説のなかに、もの言ふ牛の話」と述べている。その末尾に「毎年の七夕にはいつも秋の雨がふりそそぐ。それは彼等が会合の時に落す歓びの、或はまた悲しみの涙である。」と描かれたように、「七夕」の伝説が入っている。また、文中の「多くの鴉」は「多くの鵲」の誤りと考えられる。

なお「美しい絹を織る妻」には木下順二の「夕鶴」（一九四九年）と似ている点も見られるが、時間的には、春夫は「夕鶴」を参考にする可能性がない。しかし「鶴の恩返し」というような民話は以前から東北地方を中心に伝承され、日本全国に広がっているから、春夫がその民話から啓発されたことは想像に難くない。

以上の考察により、春夫は「美しい絹を織る妻」を創作する際に、大量の漢籍に限らず、民間伝説や口頭伝承の物語を含めて、多くの資料に目を通したことが推測できよう。佐藤春夫はこのように資料を複数参考にして、自らの作品を作り上げたのである。

四、仙人の話について

「美しい絹を織る妻」を含めて『支那童話集』に収録された、『広記』取材の一〇編は全部仙人に関する物語であり、後の「玄宗皇帝と仙人たち」も同じパターンである。春夫はなぜ仙人の話に興味を寄せたのか、また如何にそれを日本に紹介したのかという問題は、仙人の一連作を整理し典拠ごとに照合している過程で、明瞭になってくる。

「わたしはすべての童話のやうな世界が好きなのである」(12)と言い、童話のような仙人の世界に興味を示す春夫の気持ちが理解しやすいであろう。もう一つの理由は、『広記』における「神仙」五五巻、「神」二五巻、「女仙」一五巻といった、仙人関連の内容は圧倒的に数多くあるからであろう。

「奇妙な虫」の原題は主人公の名前「陸顒（りくぎょう）」である。麺を大食いする書生の陸は南蛮人の薬を飲んで腹中の虫を一匹吐き出した。その天地の精気から出来た虫を持っていれば、全ての宝物を手に入れることができると言った南蛮人は、陸からその虫をもらった。後に南蛮人は仙人の持ってきた真珠を呑んでしまい、陸をつれて海の中に入っていった。陸は龍宮で宝物をいっぱい得て大金持ちになった、という物語である。

春夫は「奇妙な虫」の末尾の「其後竟不仕」（その後官職に就かない）を削除した以外に、直訳を行った。この物語が中国の南方を舞台にするから、原作の「胡人」を「南蛮人」と訳し、当時にあたっては、好訳と言えるだろう。さらには邦訳に困難

な「錬丹」のシーンも以下のように正しく訳されてきた。

▽典拠『広記』の「陸顒」

置油膏於銀鼎中。搆火其下。投蟲於鼎中錬之。七日不絶燎。

○春夫の「奇妙な虫」

銀の鼎の中にいろ〳〵な油を盛つて下から火を焚いて顒の腹の中のから出た虫をその中へ入れました。そして薬を錬るようにして、七日七夜の間火を絶やさずにそれを煮たのでした。

中国人はもともと鬼神を信じたが、鬼神と人間とは隔離されていた。人間と鬼神とを行き来させようとしたために、巫が生まれた。後に巫は二つに分かれ、一つは方士となり、一つはそのまま巫であった。一般的に、巫は鬼について、方士は錬金と昇仙について述べた。ことに「不老長生」を求めて仙人になることは、秦・漢以来、六朝を経て唐代まで盛んとなったのである。

「奇妙な虫」における「錬丹」の続きとして、春夫は「徐福」を通じて「不死之草」「霊薬」を求めていた古代人の姿を描いている。実際に、徐福伝説は、中日韓の三国に散在し、そのストーリーは地域によって様々である。「玄宗皇帝と仙人たち」（前掲同）の末尾に見る春夫の徐福像は以下のようである。

始皇帝は不老不死の薬を求めて徐福といふ方士（仙術の研究者）を蓬莱の嶋に遣はした。その船が漂着したのがわが国で、それもわたくしの故郷の和歌山県新宮のあたりだと伝へられてゐます。徐福は始皇帝の勅命で仙薬を採りに行くといふ口実で、ほんたうはこの暴君の暴政を逃れて平和な殖民地を捜す目的で美しい悧潑な元気のいい少年少女たち三千人を乗せて船出したのが漂流したのだといふことです。

しかし、春夫は伝説と口碑を選ばずに『広記』巻四の「徐福」を典拠に同名作品を作り上げた。彼は「奇妙な虫」と違った態度をとって、一部を削除したり改変したりしたが、誤訳、誤植が多く出ている。

例えば『広記』の「徐福」では、沈羲が仙人になった時、迎えていく人は三人、つまり「黄老遣福為使者。乗白虎車。度世君司馬生乗龍車。侍郎薄延之乗白鹿車。俱来迎羲而去。」とあるが、春夫は徐福を目立たせるためか、他の二人を削除し「沈羲といふ仙人になることが出来た時、黄帝という神様は徐福を白虎車に乗せ、たくさんのお伴と一しょに、沈羲を仙人の住む国へお迎えにやりました。」と改作した。そしてその出迎えのことがあってから、人々は初めて行方不明の徐福が仙人になっていたことがわかった。もう一箇所は、徐福が男の病気を治してか

ら最後にその男に霊薬を渡す時、「可以刀圭飲之」（匙で薬を量って飲めばいい」と言ったが、この話も春夫にカットされた。

『広記』巻五「沈羲」の記載により、文中の「沈羲」は「沈羲」の誤りと判定できる。春夫は「数有烏銜草」を、「不思議な鳥がゐて、どこからとも知らず草をくはへて飛んで来ては」と翻訳するが、「鳥」は「烏」の誤りである。また、「食訖。痢黒汁数升。其疾乃愈。」は、「男がそれを飲みをはると、俄に口から真黒な汁を四五升も瀉いて、あれほど医者にかゝつても治らなかつた半身黒い病気がすっかり拭つたように治つて、立派な元の体になりました。」と書き直された。その中の「痢黒汁数升」を「口から真黒な汁を四五升も瀉いて」としたのは、「痢」の意味が分からなかったためであろう。

「仙人になつた人」と「維陽の十友」二作は、仙術を習い覚えて立派に仙人になった話と、蒸した人参を子供と見間違えて食べなかった友達の十人が機会を失って天に昇れなかった話とである。『広記』の「維楊十友」により、地名の「維陽」は「維楊」の誤りと判断できる。またこの作品には、典拠に見えない華山の景色描写を書き入れた。だが、維楊という地方は果たして長安（現、西安）辺りの華山に近いか、距離的にどのぐらいあるかを推定し難い。しかし、景色描写や会話を和らげる表現のようなところに、技巧を工夫して小説らしく綴るという春夫の意図がはっきり看取される。

さらには、春夫は、唐代で盛んな道観で修業する道士の予言が不思議に当たった物語も選択した。それは『広記』巻四三の「尹真人」と「廬山人」を、それぞれ「いひ伝へにそむいた人」と「廬山人」に改作したものである。春夫の「廬山人」では、典拠の後日譚は削除されたが、登場人物の「超元卿」は「趙元卿」の誤植と思われる。

「仙術のいたづら」は『広記』の「張卓」に素材を採り、仙人に教えられた隠身などの仙術をいたずらに使った張卓の物語を書いたが、典拠と相違する点が多くて、創作と言ってもよい。例えば冒頭の「明経及第。帰蜀覲省。」と描かれた張卓は、「呑気な人で、これといふきまつた家ももつてゐません。どうしたものか親戚縁者といふようなものも一向ないらしい様子です。」と変更されたが、次の展開で「家へ帰りたくて仕方がないようになりました。」、「どうしても故郷へ帰りたいといふことを正直にいひますと、仙人のお爺さんも心よくゆるしてくれました。」という場面を見ると、前後が矛盾しているのに気づいた。また「某有一女。兼欲聘之。卓起拜謝。是夕成礼。」つまり卓が仙人の娘と結婚するというシーンは削られ、最後に仙人が婿の卓と娘をつれて三人で仙山に行ってしまったところも、師の仙人が卓の手をとって虹のような橋に登り見えなくなり、山に消えた、と改作された。

「恐ろしい古井戸の話」では、古い井戸にいる毒龍に脅かされて人間を誘い込んで毒龍に食わせる、綺麗な女に化けた「鏡の精」は、陳仲躬に救われた話である。だが、末尾の陳仲躬の

出世と鏡の由来、鏡の裏の文字を述べる部分は全て削除された。原文の「牙人」(13)は古代の中国語では、「商売の仲介をするもの」という意味だが、「見たことのない男」と直されて、当てはまるとはとても言いにくい。

ちなみに、「玄宗皇帝と仙人たち」にも少し考察を加えたい。この作品は『支那童話集』出版からの一二年後に発表したが、付記としてこの作品の結末に、「今度の話は十仙子と二十七仙とは唐の時代の小説を宋の時代になつて集めた大平広記といふ本のなかから拾つた序に霓裳羽衣は別の本にあつたのを思ひ出して三つの小さな話を一つにつづけて書いてみました。」とあるように、やはり仙人の話の続きと考えられる。だが、作者は道教に熱中したり快楽を求めすぎたりして国を乱してしまった唐の玄宗皇帝を書いたと同時に、道教が中国人に大きな影響を与えたこと、さらに「支那人が阿片を吸ふのも何か道教の影響があるやうな気がします」と、深刻な社会問題を提出している。なお、読者によく理解させるために、春夫は多くの説明文を入れたりルビを付けたりしている。だが、『広記』の原文と照合すると、文中の「或池」は「咸池」の誤り、「姚宗」は「姚崇」の誤りである。「霓裳羽衣曲」は『楽府詩集』『全唐詩』『楊太真外伝』などに載せるが、唐の柳宗元の『龍城録』に収める「明皇夢遊広寒宮」の内容に最も近い。また「二十七仙」に拠った部分では、最後の「玄宗皇帝は崩御の後、虹に乗つて昇天して月宮殿に幸したといふ趣向を芝居に書いたものもある」という話は典拠にはない。しかし、白居易の『長恨歌』(14)にも、清の洪昇の『長生殿』(15)にもその話が見られる。

ところで、唐代の怪異小説の中で、『板橋記』はその代表作と見なされ、「板橋三娘子」と改題し『広記』の「幻術」部に収められた。春夫はこの不思議な話を「人を驢馬にする話」と名づけて逐語訳という形で紹介している。ここでは、その粗筋から唐代小説の怪異について確かめてみよう。

旅館を経営する三娘子は親切で評判がいい。ある日、趙という男が旅館に泊まった。夜中になっても眠れない趙は、変な音が聞こえてくるので板壁の隙間から覗いて妙なことを見つけた。それは、三娘子が一畳の土間で呪文を唱えながら水牛の人形や農耕用の小道具を使って、種撒きから蕎麦の収穫までやり終わって、蕎麦粉で焼餅を作ったというシーンだ。翌日、何も知らない客たちがその焼餅を食べると、とたんにひっくり返って驢馬になった。三娘子はそのような驢馬を安く旅人に売る。一ヶ月後、趙は焼餅を袋に入れておいてまたその旅館に泊まった。翌る朝、趙は三娘子の焼餅を用意した焼餅と取り換えてから、一緒に食べると彼女を誘った。三娘子は自分の作った焼餅を食べると驢馬になってしまった。趙は彼女の化した驢馬に乗って歩いている時に、ある老人と出会った。老人は三娘子を許してやってくださいと言ったら、驢馬の腹中から三娘子が出てきてお辞儀をしてどこかに消えた。

(以下次号に続く)

注

（1）「からもの因縁―（支那雑記の序として）―」（『定本佐藤春夫全集』第二二巻、臨川書店、一九九九年八月。所収）一八一頁。

（2）注（1）と同じ。一八〇～一八一頁。

（3）注（1）と同じ。一八〇頁。「からもの因縁―（支那雑記の序として）―」に「英訳などを参考したのが、支那の話を語り直す時に幾分の新しさを添へるに役立つたもの」とある。

（4）魯迅『中国小説史略』（今村与志雄訳『魯迅全集』第一一巻、学習研究社、昭和六一年五月。所収）一八二頁。
一九二三年一二月、魯迅の『中国小説史略』上冊が北京大学第一学院の新潮社により出版され、初版本の刊行の直後、当時、在北京の日本人が発行していた日本語週刊誌（『北京週報』九四号、一九二三年一二月二三日）に紹介記事「魯迅の『中国小説史略』」が載った。翌年六月、『中国小説史略』下冊が同じく新潮社により出版された。一九二五年に、『中国小説史略』上下冊が北京の北新書局社により一冊にまとめて出版された。

（5）『太平広記』（中華書局、一九六一年九月）一頁。
原文は以下に掲げる。「體周聖啓。德邁文思。博総群言。不遺衆善。以為編秩既広。観覧難周。故使采摭菁英。裁成類例。」

（6）『太平広記』の「進書表」の記載によれば、『太平広記』編纂を一緒にした一三人は、呂文仲、呉淑、陳鄂、趙鄰幾、董淳、王克貞、張洎、宋白、徐鉉、湯悦、李穆、扈蒙である。

（7）中島長文訳注・魯迅『中国小説史略』1（平凡社、一九九七年六月）二七二～二七三頁。

（8）魯迅『集外集拾遺補編』（伊藤虎丸ら訳『魯迅全集』第一〇巻、学習研究社、昭和六一年八月。所収）一六〇頁。

（9）「支那短編小説管見」（『定本佐藤春夫全集』第二一巻、臨川書店、一九九九年五月。所収）二五二頁。

（10）張傑「魯迅与『太平広記』」（『魯迅研究月刊』、二〇〇一年第一二期）参照。

（11）曹植の五言詩「霊芝篇」の原文は以下に掲げる。「董永遭家貧。父老財無遺。挙假以供養。佣作致甘肥。責家填門至。不知何用帰。天霊感至徳。神女為秉机。」

（12）「魯迅の『故郷』や『孤独者』を訳したところ」（『定本佐藤春夫全集』第二五巻、臨川書店、二〇〇〇年一〇月。所収）一三七頁。

（13）『辞源』に拠り、宋の書物に「現在『牙』と言っているのは、売買交易に従事する人のことで、唐の時代の人は牙と書いていたが、牙に似ていることから、牙と書くようになった。」と出ている。

（14）『全唐詩』（巻第四三五）所収の白居易の『長恨歌』に、崩御の後、玄宗皇帝が虹に乗って昇天して月宮で楊貴妃と再会して幸せに暮しているという描写がある。その部分を抜き出す。

忽聞海上有仙山　山在虚無縹緲間
楼閣玲瓏五雲起　其中綽約多仙子（中略）
七月七日長生殿　夜半無人私語時
在天願作比翼鳥　在地願為連理枝

（15）洪昇は清の初期の劇作家、字は昉思、号は稗村。『長生殿』はその代表作である。
長生殿は唐の長安の郊外にある皇帝の庭園であり、現在の西安市臨潼区の華清池である。

［ちょう・ぶんこう　河南師範大学准教授］